

名誉顧問のコモンセンス

二律背反 表裏論 6

飢餓か、救荒か？



夏の茄子で秋の凶作 報徳先生は、「人世の災害で、凶年より恐いものはない」といいます。先生の有名な逸話で、「夏に食べた茄子(なす)の味で、その年の秋の凶作を言い当てた」というのがあります。

凶年に當り 先生 厚く救荒の道を行ふ 【『報徳記』52頁】

于時(とき)に天保四癸巳(みづのと)年(1833)、初夏時氣不順にして霖雨(りんう)止まず。先生、或時、茄子を食するに其の味常に異なり。恰(あたか)も季秋(きしゅう)の茄子の如し。

箸を投じて歎じて曰く — 「今時、初夏に當れり。然して此の物、既に季秋の味をなすこと豈に唯ならんや。是を以て考ふるに、陽発の氣薄くして陰氣既に盛なり。何を以てか米穀・豊熟することを得ん。預め非常に備えずんば百姓飢渴の憂い罹(かか)らん歟(か)」。

是に於て三邑の民に合して曰く — 「今年、五穀、熟作を得ず。預め凶荒の備へを為すべし。一戸毎に畠一反歩、其の貢税(こうぜい)を免すべし。速に稗(ひえ)を蒔き、飢渴を免

るゝの種とせよ。忽(ゆるがせ)にすべからずと。

諸民、之を開き笑ひて曰く — 「先生明知ありと雖も、何ぞ予(あらかじ)め年の豊凶を知らんや。戸毎に一反歩の 稗 を作らば三邑夥多(かた)の稗なるべし。何れの処に之を貯えん。且つ、稗なるもの、旧来、貧苦に迫れりといへども未だ之を食はず。今、之を作ったりとも食ふことを得ず。然らば無用のものと云べし。仮令、人に與ふるといへども誰か之を受けん。詮なきことを令するものかな」と嘲(あざけ)りたり。

農民たちはこぞって、先生が「稗」を作れといったことをバカにしました。「稗など、どんなに飢えてもだれも食べないぞ」というのです。この驕(おご)りは、後で後悔することになります。ここで、「常識と卓見のデカップリング」がなされます。

「然れども貢を免(ゆる)し作らしむ。之を背(そむけ)ば必ず令(法律)を用ゐざるの咎(とが)めあらん」と。己むことを得ずして、俄に稗を作り、「無益の事をなせり」と怨望する者あるに至る。

然るに盛夏といへども降雨多くして冷氣行はれ、終に凶歳となり、関東奥羽の飢民枚挙すべからず。此の時に至り、三邑の民「**稗**」を以て食の不足を補ひ、一民飢えに及ぶものなし。始て先生の明鑒(めいかん)、予(あらかじ)め凶荒を計り、下民を安ずるの深意を知り、我が知の浅々(せんせん)たるを悟り、曾て無益の事となし、活命の令を嘲(あざけり)たるを悔い、大に其の徳を辞す。

大飢饉対策詳細

この天保の大飢饉のときの様子を更に詳しく述べたのが、『二宮翁夜話』にあります。それも引用しておきましょう。一部は重複します。【『二宮翁夜話』第179頁】

翁はこう言われた — 「天保四年(1833)と同七年の両度の凶年で七年がもっともひどかった。早春から引きつづいて気候が不順で、梅雨から土用に降りつづき、気候ははなはだ寒冷で、雨天・曇天のみで、晴れた日はまれであった。晴れると思えば曇り、曇ると思えば雨が降った。私は土用前から心配していたが、土用にかかって、空の気色が何となく秋めき、草木にふれる風も何となく秋風めいた。ちょうどそのころ他より新茄子が到来したのを糠味噌につけて食したところが自然に秋茄子の味がした。これによって意を決して、その晩から凶年の用意に心を配り、人々に諭してその用意をさせ、その夜終夜手紙を書いて諸方に使を出し、凶年の用意一途(いちず:ひたむきに)に力を尽した」。

「その方法は、明地(あきち)・空地(そらち)はもちろん、木綿の生えている畑を潰し、荒地・廢地を起こして、蕎麦・大根・蕎麥菜(かぶらな)・胡蘿蔔(にんじん)などを十分に蒔きつけさせ、粟・稗・大豆など、すべて食料になるものの耕作・培養を精細にさせ、また穀物の売買があるときには、何品にかぎらず、みなこれを買入れ、すでに借入れ金をするにも抵当がなくなったので、貸金の証文を抵当に入れて金を借用した」。

「この飢饉の用意を諸方へ通知したなかで、厚く信用してよく実行したのは谷田部・茂木領であった。この通知を受け取ると、その使いと同道して、郡奉行が自分から馬に鞭(むち)打って馳せつけて、その方法を尋ね、急ぎ帰って、郡奉行・代官役などが属官を率いて村里に赴いて懇々と説諭して、まず木綿畑を潰し、荒地を起こし、廢地には残らず食料となるべき蕎麦・大根などの類をおびたたく蒔きつけ、堂寺の庭までも説諭して蕎麦・大根を蒔かせたという」。

「下野国(栃木県)真岡(まおか)近郷は、真岡木綿の出る地方だから木綿畑がはなはだ多い。その木綿畑を潰して蕎麦を蒔きかえるのを、愚民にはことのほか欺く者もあり、また苦情をならす者もあった。そこで愚民は、あきらめのために、所々に一畝ずつ出来のよい木綿畑を残しておいたが、綿の実の一つも結ばず、秋になって初めて私の説を信じたという。愚民の諭(さと)しにくさにはほとほと困却した。また秋田を刈り取った千田に大麦を手のまわるだけ多く蒔かせ、それより畑に蒔いた菜種の苗を田に移して食料の助けにした。凶年のときは油断なく手配りして食物を多く作り出すがよい。これが私が飢えを救った方法の大略である」。

さすが、報徳先生です。まったく、揺るぎがありません。もし、飢饉が来なかったらどうしたのでしょうか。また、この自信はどこからきたのでしょうか。不思議と言うほかはありません。

稗の効能

また、報徳先生は、「稗」(ひえ)の効能を説きます。「稗」は穀物の種類のなかでももっとも軽んじられる穀物です。米農家からは雑草として扱われていて、専用の除草剤が市販されているほどです。いまでは小鳥の餌など飼料用としての利用が多いもので人間が食べるものではありません。でも、報徳先生は「稗」の効能を説きます。それも、至れり尽くせりの教えです。人間に食べるようにさせるのです。なんにおいても、先生は徹底しています。

翁はこう言われた — 「穀物を貯蔵しておくのに数十年を経て少しも損じないのは稗(ひえ)にまさるものはない。申し合わせてなるべく多く積んで置くべきだ。稗を食料に用いるに、凶年のときには糠(ぬか)をとってはいけない。空稗(からひえ)一斗に小麦四、五升を入れて、水車の石臼で挽き、絹ぶるいにかけて団子に作って食べるがよい。俗に餅草という蓬の若葉を入れれば味がよい。稗を凶年の食料にするにはこの法が一番徳用である。稗飯にするのは損である。しかし、上等の人[身分の高い人にもたべさせるのです]の食料には稗を二昼夜水につけて取り上げて、蒸籠で蒸してよく干し、臼(うす)で搗(つ)いて糠を取り、米を少しまぜて飯にたくのだ。非常にふえるから水を余分に入れてたくがよい。上等の食料として用いるには、これよりよい方法はない。だから富有者が自分のためにも[稗は]多く囲っておいてよいものである。できるだけ貯蓄するがよい」。

先生は、あくまでも、このように「飢饉のときには、農民たちがそろってバカにした稗が一番良い」というのです。穀物についても、また、その食べ方についても、並みの農民よりもよく知っていました。

翌、午年に至り、再び令を下して曰く — 「天運、数ありて饑饉となること遅くして五六十一年、早くして三十四年、必ず凶荒至れり。天明度以来を考ふるに饑饉来るべし。去年の凶荒は甚しからず。未だ其の数に當るに足らず。必ず今一度大凶至らんこと近年にあり。汝等、謹(つつし)て之に備よ。今年より三年の間、畠の貢ぎ免すこと去年の如くすべし。家々心を用ゐ、『稗』を植て預(あらかじめ)め飢渴の憂を免るべし。もし怠るものあらは里正之を察し、我に告よ」と命ず。

やはり、「稗」がいいというのです。他の作物や木や草ではいけないのでしょうか？ いけないのです。

救荒(飢饉を救うこと)をこまかに説き、草木の根・幹・皮・葉などの食用になるもの数十種を調べて、その調理法などを記した本を翁に贈った人がある。

翁はこう言われた — 「草根や木の葉などは、ふだん少しずつ食べてみる時には害はないものだが、これを多く食べ日数を重ねると病気をおこすものだ。軽々しく食うのは悪いことだ。それゆえ私は、天保の二度の飢饉のとき、郡村を諭すのに、草木や木の葉などを食べろとは決して言わなかった。病気になるのを恐れたからだ。飢えた人々が自分で食べるのは仕方がないが、民を治める職にある者が飢えた人々に向かって草根・木皮を食べろと言い、かつ食べさせるのははなはだ悪い。それを食べれば一時の飢えはしのげるが病気になれば救うことはできない。恐ろしいことだ。だから、『人を殺すのに杖と刃の違いはない』というたとえ(『孟子』梁恵王上篇)と少しもかわらない。これはまことに恐るべきことだ。

農民学者

学者批判 報徳先生は、食用になる植物やその調理法を書いた学者を批判します。「簡単に、草根・木皮を食べろ」という指導者は無責任だといいます。「文字を読むことのみを知って物事の道理を弁(わきま)えざる者は、これを学者と言うべからず」と諭吉翁は『学問のすゝめ』でいいます。「ただこれを文字の間屋といふべきのみ」【『学問のすゝめ』20頁】

報徳先生は、「指導者が薦めるように、軽々しく草根や木の葉を多く食べさせると病気になる」といいます。先生は、実際に自分で草根や木の葉を食べてみてから責任を持って判断しているからです。この文字の間屋学者と農民学者の報徳先生との違いは、他人を大切にする「仁の人」であり、学問を人間相手に考える「ヒューマニスト」であるかどうかの違いです。そして、飢餓の恐ろしさと稗のような不味くても安心な穀類を蓄えるように説き、「一般の人の心得となるべき事柄」(『学問のすゝめ』)を、易しく、優しく、指導する力があるかどうかの違いです。これこそ、「書齋学者と現地実践者による食用植物のデカップリング」です。

「しかし食べ物がなければ死ぬ。これをどうするか。ここを深く考えなくてはいけない。だから私は飢えた人々を救うのに、病気になる恐れのない方法を設けて烏山・谷田部・茂木・下館・小田原などの領地に実施したのだ。こういう書物は、私がしたところとは違うものだから私は採用しないのだ。世間の学者は、草根や木の葉などを調べて、これも食べられる、あれも食べられるというが、私は聞きたくもない。なぜなら、自分でも食べてよく経験したものでなければはなはだおぼつかないからだ。かつ、こういうものを頼みにすると凶年の用意を自然に怠るようになって世の害となろう。それよりも凶年・飢饉の惨状のはなはだしいことを僧侶が地獄のありさまを絵に描いて老婆を諭すように懇々と説き諭して、村ごとに穀物を蓄えさせることを勧めるほうがよほどすぐれている。だから私は、草根・木皮を食べろとは決して言わず、飢饉の恐ろしいことと貯穀をしなければいけないことだけを諭して貯穀をさせるのを務めとしている」。

【『二宮翁夜話』172頁】

農村学者 報徳先生は、農村学者でした。農民であり、学者でしたから、飢餓のときの安全な食べ物の選別法もしっかりと知っているのです。普通の物知りや学者とは違います。まだ、飢餓対策の「救荒」としては、食用植物に詳しい専門家よりも、地獄絵を説くお坊さんの方がマシだということです。ここに、報徳先生の農民指導者としての矜持(きょうじ:誇り)と責任感があります。いかに、いい加減で、実際を知らない無責任な識者や学者を嫌っていたことでしょう。

三邑、去年の[稗を蓄えよ]前見、明かなるに驚き、且、飢渴の害を免れたれば、謹んで命に従ひ糞養(肥え)を盡して之を作れり。比の如くすること三年、三邑の稗、数千石の備え

あり。同七丙申年(1836)に至り、五月より八月まで冷氣雨天、盛夏と雖も北風の寒きこと膚(はだえ)を切るが如し。常に衣を重ねたり。年、大に飢う。実に天明凶年よりも甚しき處あり。関八州・奥羽、飢民夥しく餓殍(がひょう:餓死者の死体)道路に横たわり行人潸然(さんぜん:さめざめと涙を流す)として面を覆いて過ぐるに至る。此の時に當り櫻町三邑の民而己、此の憂を免る。先生、三邑を戸毎に廻り、無難のもの・中難のもの・極難のものの三段に分ち、老少男女を選ばず、一人雑穀を交へ五苞づつとなとなし、其の数に満たざる者は之を補ひ之を與へ、一戸五人なれば二十五苞、十人なれば五十苞、十五人なれば七十五苞を備へたり。貧者は豊年、猶、此の如く豊かなることを得ず。

この最後の言葉 — 「貧者は、豊年、猶、此の如く豊かなることを得ず」とは、なにをいいたいののでしょうか。「飢餓のときほど豊年だ」は、「飢餓と救荒の二律背反」が皮膜の間にあることを言っているのでしょうか。「困っているときほど親切にしておやりなさい」という「仁」のメッセージなののでしょうか。それとも、貧民の代わりに、お上に対して皮肉っぽく物申したのでしょうか。

先生諭して曰く — 「今年、飢饉の為に飢渴・死亡を免れざるもの幾萬人、誠に悲痛の至に堪ざるなり。然るに汝等是の如く処置するが故に一民も飢渴の憂なく平年の如し。之に安んじ安座して食する時は、冥罰(めいばつ:天罰)の程恐るべし。汝等、世人の飢渴を察し、朝は未明に起きて縄を索(な)ひ、日々田圃に力を盡し、明年(翌年)培養の備えを厚くし、夜は又縄をなひ、錠(むしろ)を打ち、来歳、十分の作を得ば、每家、彌々(いよいよ)永續の根本なり。**天災変じて大幸となる** 可し。必ず怠るべからず」と教ふ。

「この飢餓の時代に安楽に暮らせたからといって、ホッと一息ついてはいけな。世の中が飢渴していることを忘れず、ますます勤農に励め」と報徳先生は手綱を緩めません。

三邑の民、大に感動し、専ら家業を勤め、又一段の幸いを得たりと云ふ。

飢餓からの勝利宣言 「飢餓と救荒」の二律背反は、「**天災変じて大幸となる**」の言葉で解決しました。天災である飢餓も、それに正しく備えれば、救荒となり、大幸ともなるのです。先生のいつもの「天道＝自然」に対する負け惜しみのようにもありますが、「人道＝人間」の勝利宣言のようにも聞こえます。

[2025/05/09 都築正道]